東日本大震災の被災者と方言

櫛　引　祐希子

Local Dialects Bring Survivors of the Tohoku Earthquake Together

Yukiko　Kushibiki

1. は じ め に

東日本大震災の被災地では、地元の方言が被災者の心の拠り所となっている―。東北大学方言研究センター（2012）をはじめ被災地の方言について報告する研究の多くが、この点で一致している。共通語ではなく方言だからこそできる励ましがある。方言だからこそ伝えられる思いがある。方言はまさに心の絆。おそらく、被災地で暮らす人たちに直接尋ねても、こうした答えが返ってくるだろう。

とはいえ、こんな疑問もある。震災後の方言は、果たしてそれほど大きな働きをしているのか。方言研究者が過大評価しているだけではないか。方言は本当に被災地の絆と言えるのか。

だが、それにはこんな答えが返ってくるはずだ。田中（2011）（2012）の報告にあるように、被災地のあちらこちらで方言の標語が掲げられ、方言を使った復興支援のグッズが販売されたではないか。それに被災地の人たちは、共通語の「がんばろう」よりも方言の「がんばっぺ」の方が励まされると言っているではないか。たとえば、東北大学方言研究センター（2012）には市民のこんな声が紹介されている。

> よく「がんばろう宮城」とか「がんばっぺ宮城」とかいったスローガンを目にします。自分自身、自分の家族、たくさんの友人を失っているせいか、共通語の「がんばろう」という文字を見ると、ときどき腹が立つんです。何ががんばろうだ、これ以上何をがんばれというんだ、と思うんです。でも、「がんばっぺし宮城」とか「負げねえぞ宮城」と方言で書いてあると、「んだんだ、まげねえ！」と思うんです。（p217）

しかし、被災地にほぼ毎月出向く筆者に聞こえてくるのは、こうした声だけではない。「も

うたくさん」「わざとらしい」。そんな否定的な声も被災者たちの中にはある。

今年（2014 年）で震災から 3 年が過ぎた。時間の経過とともに薄れゆく記憶がある一方で、3 年前に被災地で見た光景は瞼の裏に焼き付いている。震災はまだ終わっていない。そう実感できる今だからこそ、震災後の方言について今一度振り返ってみる必要があるのではないだろうか。それはとりもなおさず、方言が被災者にとってどのような存在であったのかを見直すことにもつながるはずである。

本稿は、はじめに筆者が取材した岩手県釜石（かまいし）市と大槌（おおつち）町での取り組みを二つ紹介し、次に被災地で掲げられた方言エール・方言スローガンと被災者の心理の間に生じた齟齬について述べる。そして、まとめとして被災者と支援者の関係から見えてくる震災後の方言について論じることにする。

2. 支援者が出会った方言/被災者が再発見した方言

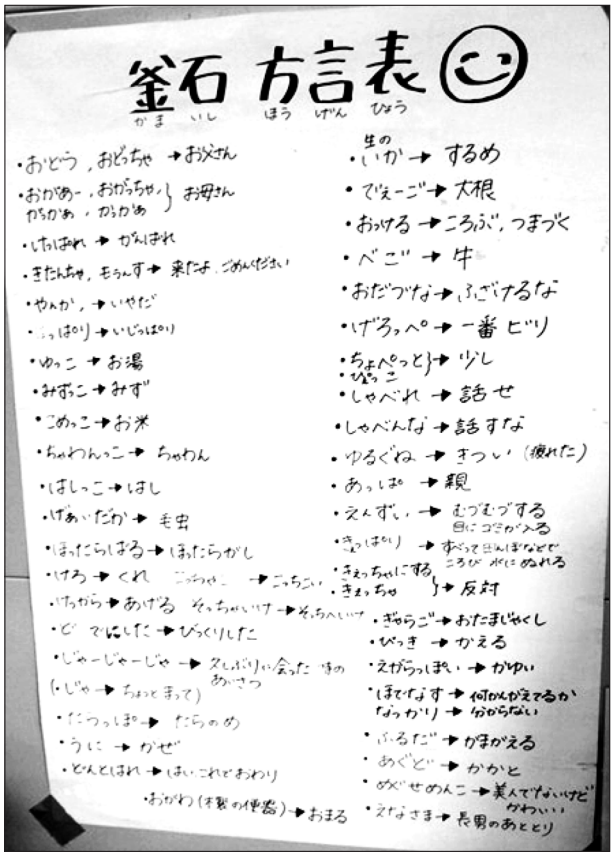
2.1 「釜石方言表」と釜石・大槌方言塾

2013 年 3 月に終了した釜石・大槌方言塾は「釜石・大槌地域情報 WEB キックオフ」（http://www.kickoff-rias.com）で連載されていた。担当者は、リアス NPO サポートセンターのスタッフで、岩手県大槌町出身の二人（30 代）である。

方言塾の 1 回目では、釜石の仮設住宅に貼り出された「釜石方言表」（釜石･大槌方言塾①より転載）が紹介されている。これは、仮設住宅の住民が他地域から来る支援者のために作成したものである。この表を見たスタッフは、こう書いている。

> 私は目にした瞬間にとても引き込まれ、見入ってしまいました。

【写真 1】釜石方言表



「方言って本当におもしろい」

大槌出身の私も実は、震災後に方言を集めていたのですが、釜石と大槌では微妙に言葉が違います。

たとえば､写真の中にある（右の列の上から 7 行目）「少し」という意味の「ちょぺっと」という言葉は大槌では「ぺっこ」や「ぺぇんこ」といいます。[注1]

（釜石大槌方言塾①）

「釜石方言表」は被災者が支援者との方言摩擦を少しでも解消するために作成したものである。どのような基準でこれらの方言語彙が表にまとめられたのかは不明だが、被災者が他地域から来る支援者との間の方言摩擦の解消に向けて能動的に行動していたことがうかがえる。

この「釜石方言表」の紹介からはじまった釜石・大槌方言塾は、大槌町出身のスタッフ 2 名が仮設住宅でのイベントを報告しながら、そこで耳にした方言を紹介していくというかたちで連載を重ねていく。たとえば、釜石・大槌方言塾の 4 回目は釜石の仮設住宅でおこなわれた塗り絵とマグカップ作りの教室の様子を報告しているが、ここでスタッフが耳にした方言が紹介されている。

お昼近くになって、あるお母さんが談話室に入ってきました。

「お～来たね～! ほら、一緒にやっぺし～!」「しばらくだね～」などと参加者さんたちが、次々に声をかけています。

「今日は、何？ぬりえ？私、センスねぇがら（ないから）（笑）」という会話の声が聞こえてきました。私たちスタッフも「お母さん、マグカップ作りもありますよ～」など声をかけていました。すると、お母さんから「ぃや～、私、台所すけさ来たんだよね～」という一言が！「すけさ来たんだよね～」とは、いったいどういう意味なのか、みなさんお分かりでしょうか？

「ぃや～、私、台所のほうを手伝いに来たんだよね～」という意味です。

【釜石】【大槌】では、『手伝うこと』を（すける）と言います。

『手伝ってちょうだい』のときは「すけでけで～」と言います。

語源は、なんでしょうね…。

私自身もはっきりとはわかりませんが、「助ける」からきてるのでは、と思います。

（釜石大槌方言塾④）

おそらく、このスタッフは、この取材に携わらなければ、方言「スケル」[注2]の語源につ

いて考えを巡らせるようなことはなかっただろう。最後にこう書いて締めくくる。

参加されるみなさんの会話の中にも方言がたくさん出てきて、本当に心地よく、そして、何よりも会話するのがとても楽しみになっています。また、お母さんのやさしさや参加したみなさんのあたたかい会話に触れて、改めて方言っていいなと感じました。

（釜石大槌方言塾④）

釜石・大槌方言塾のスタッフたちは、支援者でもあり被災者でもある。彼らの手によって書かれた釜石・大槌方言塾は、被災地の方言をインターネットで発信するだけでなく、今まで特に気に留めていなかった地元の方言を彼らに再発見させる機会にもなった。

2.2　大槌弁取扱い説明書

もう一つ、震災がきっかけで被災者が地元の方言を再発見した事例がある。東広島市から派遣された市の職員と岩手県大槌町の住民との間で作られた「大槌弁取扱い説明書　広島県民が聞いたほぉでーねーおーづつ弁」[注3]である。計 14 枚の文書の表紙にはこう書いてある。

平成 24 年 4 月に広島県東広島市より、大槌町に派遣され仮設団地の被災者支援担当者となった M さん（注；原文では本名）が、最初の（原文ママ）戸惑ったのは大槌の寒さと言葉であった。

寒さには程なく慣れてきたが、大槌の言葉は意味不明、ただ相手の話を聞くだけ。聞いて、うんうん、そうですか、それで？って、相づちを打ったり、話を促したりするだけ・・まもなく聞く力が自然と身につき、相づち名人と言われた。

意味不明の言葉を M さんが記録し私たちが大槌流に解釈した。これが M ノートの最初のスタート 1 ページ目となる。

（「大槌弁取扱い説明書」冒頭）

M さん（30 代・女性）は学生時代に東北を旅行した経験はあったものの、出身は山口県で東北方言とは関わりのない人生を歩んでこられた。震災のあった翌年の 2012 年、東広島市からの派遣職員というかたちで役場の職員の大半が津波で亡くなった大槌町に赴任する。その生活の中で耳にするようになった大槌の方言を仕事用のノートにメモ書きしていったそうである。この時、大槌弁の解説をしてくれたのが、O さん（30 代･女性）と Y さん（50 代･男性）だった。この表紙の文章は Y さんのものである。「広島県民が聞いたほぉでーねーおーづつ弁」は、「広島県民が聞いた訳のわからない大槌弁」ということである[注4]。

M さんが書き留めたノートのメモは、「方言＝共通語」の形をとっている。6 月 15 日から 7 月 27 日に書かれたノートの例を挙げよう。

ちょうす＝さわる
ねまる＝すわる

だーさい＝
だーさいさい＝　} しまった
あ　さい＝

おだづ＝
おだってる＝　} 悪ふざけをする

とびゃんこ＝ちょっと、ちょびっと

ここに挙げたように、動詞（ちょうす、ねまる、おだづ、おだってる）、感動詞（だーさい、だーさいさい、あ さい）、副詞（とびゃんこ）と言ったように、M さんが聞き取り書き留めた大槌の方言は基本的に単語で書かれている。前節で紹介した釜石・大槌方言塾が文として方言を書き留めているのとは対照的である。おそらくこれは、M さんが大槌方言の話者ではないため印象に残った方言を断片的に書き留めたからだろう。だが、地元の方言話者ではないからこそ、未知の方言についての情報を少しでも書き留めようとする態度が垣間見える。たとえば「あめる」と「ゆるぐない」はこう記されている。

あめる＝いたむ
　　生もの、弁当
　　はっこう系の
　　糸を引く　} いたみ方
　　カビではない

ゆるぐない＝楽でない
　　大変だったねえ
　　肉体的
　　精神的　} 両方つかえる

「いたむ」という意味の「あめる」が意味する状態と「楽でない」という意味の「ゆるぐない」が表わす状態の詳細を書き留める M さんのこうした態度に、大槌町の出身者である O さんと Y さんはある種の感慨をおぼえたようだ。Y さんは「大槌弁取扱い説明書」の冒頭にこう記している。

大槌弁で「ゴミを捨てる」ことを「ゴミをなげる」と言う、(原文ママ) しかし「(女を) 捨てる」は「(女)をなげる(原文ママ)」とは言わない。こんな例を松山ノートに記録しておいたおかげで、私は普通に話していた大槌弁を改めて自分の頭を (原文ママ) 整理して、忘れかけていた抽斗を開け、思いもよらぬ発見をする機会を得たのである。

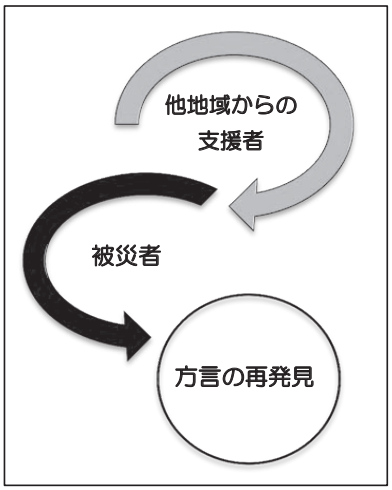
(「大槌弁取扱い説明書」冒頭)

2.3　方言摩擦の解消と方言の再発見

1995 年 1 月 17 日の阪神大震災は神戸を中心とした一点集中の災害であった。こうした場合、近接の地域が中心となり支援活動にあたることができる。そうした地域は被災地の方言と同じ方言や似通った方言を使用しており、被災者と支援者のコミュニケーションで方言が障害となり摩擦を引き起こすことはあまりない。しかし、東日本大震災は青森県から茨城県までの太平洋側沿岸を中心とした広域災害であり、阪神大震災が“点”の災害であったとすれば、東日本大震災は“面”の災害であった[注5]。そして、“面”の外側にある地域からの支援者が大量に被災地に入ったため、被災者と支援者の方言摩擦―支援者が被災者の言葉を理解できないということ―は避けられない事態となった。釜石・大槌方言塾で紹介された「釜石方言表」も「大槌弁取扱い説明書」も、東日本大震災が“面”の災害であったことが作成の背景にある。

一方、方言研究者たちも“面”の災害による方言摩擦の問題を解消すべく研究成果を踏まえた支援活動を展開した（たとえば「支援者のための気仙沼方言入門」(東北大学方言研究センター 2011)、「方言支援ツール」(岩城他 2013)（今村他 2014)、『東北方言オノマトペ用例集』(竹田 2012))。これらは、東北の方言に精通した研究者たちの手によるもので、学問的な知識に基づき、被災地での方言摩擦を解消するという明確な目的で作成されている。

【図】支援者と被災者と方言の関係



だが、「釜石方言表」や「大槌弁取扱い説明書」は、被災者と支援者のつながりのなかで作成されたという点で大きな意味を持つ。「釜石方言表」と「大槌弁取扱い説明書」は＜他地域からの支援者＞の存在が＜被災者＞に方言を再発見させるきっかけになっている。これを図示すると右のようになる。

「釜石方言表」の場合は、さらにこの連鎖が続いていく。「釜石方言表」の紹介で始まった釜石･大槌方言塾は、地元の方言を紹介していくかたちで連載を重ねていく

からである。

被災者と支援者が、それぞれ直面した方言摩擦という緊急の課題を解消すべく起こした行動が、結果的に被災地の方言を再発見することにつながっていく。ここから見えてくるのは、単なる支援の享受者でも傍観者でもなく、目の前の現実を能動的に捉え、そこから新たな現実を見出そうとする被災者たちの姿である。

3. 「がんばっぺ」で被災者は頑張れるのか?

3. 1　「方言エール」と「方言スローガン」

こうした被災者の姿について、別の側面から考えさせるのが方言スローガンである。ここからは、被災地の至る所で掲げられた「がんばっぺ」「がんばっぺし」[注6] などの方言を用いたスローガンについて考えたい。

震災直後から被災地では各地で方言を用いたフレーズが掲げられ、大野（2013）にあるような見解を多くの方言研究者が抱いた。

> 「がんばっぺし !」とは、被災直後に沿岸各地で自然発生的に生まれた復興スローガンである。地域で暮らしてきた者同士がお互いを励まし合うために、自然と口をついて出た、地域語に根差した表現であった。被災地の人々の復興への強い意志を、確かにそこには聴き取ることができる。（p1）

故郷の姿が一変し昨日までの生活の営みが失われたなかで、人々が地元の方言に思いを込めて高々と掲げたことに多くの方言研究者が感動したにちがいない。だが、研究者たちは、被災地で掲げられた方言をどう呼ぶべきかという問題に直面した。甚大な津波の被害を受けた岩手県宮古市に在住する田中（2011）（2012）は「方言エール」と名付け、宮城県仙台市にある東北大学方言研究センター（2012）は「方言スローガン」と呼んだ。櫛引（2013）では、この二種類の呼称を同義的に取り上げたが、本稿ではこれを訂正したい。

たとえ同じ言葉であったとしても、それが発せられる状況や文脈によって受け手が感じる意味は変わる。震災直後に手書きで掲げられた方言が放つメッセージと、しばらく経ってから印刷されたり支援グッズに利用されたりした方言が放つメッセージを、被災者は異なる意味で感じ取ったことだろう。地震発生直後でライフラインもままならない生と死が隣り合わせの時期に書かれ貼り出された「がんばっぺ」は、それを目にした人たちに過酷な現状を直視させ、それを乗り切ろうというメッセージを放ったと考えられる。だとすれば、この時期の「がんばっぺ」は、田中の名づけた「方言エール」が適当である。だが、ライフラインが

復旧し日々の生活に余裕が出てきた時期に掲げられた「がんばっぺ」は、被災地の人々に困難や障害に屈せず一致団結して復興を成し遂げようという思いを喚起させる。だとすれば、この「がんばっぺ」は東北大方言研究センターが名づけたように「スローガン」という呼称に合致する。つまり、震災発生時から変化していく被災地の状態に応じて「がんばっぺ」というフレーズは、そのメッセージの意味合いを変質させたと考えられる。

ところで、そもそも日本ではいつからスローガンを掲げるようになったのだろうか。筑紫（2006）は上園政雄『標語全集』（昭和 10 年）を抜粋し、日本の標語が第一次世界大戦を契機に欧米のスローガンを輸入することから始まったと述べている。戦争を遂行し勝利を収めるためには大規模な動員が不可欠であり、それを成し遂げるためには不特定多数の人々を引きつける言葉が必要だったのである。そして、関東大震災後に標語は隆盛期を迎える。「新しい大衆プロパガンダ」として、震災後の社会制度の刷新を背景に盛り上がりを見せたというわけだ。

このようにスローガンというのは戦争や震災など、いわゆる国や地域の一大事と切り離せない関係にある。もちろん、標語は交通安全、挨拶推進、読書奨励などの活動にも使われる。したがって、戦争や震災は標語作成の必要条件ではない。だが、不特定多数の人たちを瞬間的に捉えて目的通りに動かすという標語の原理からすれば戦争や震災でこそ、その力を思う存分に発揮する。方言スローガンについて小林（2013）はこう述べている。

> 方言スローガンは、口に出すより何かに描かれることで人々の注目を集める。「がんばっぺ !」が普段の会話から切り出され、独立したスローガンとして文字に記されるとき、そこに被災地の人々の心を動かす新たな力が宿るのである。（p21）

阪神大震災でも方言スローガンは掲げられた。北後（2006）には「“ がんばろうや ! 神戸 !” の声が市民を力付けている」「“ がんばろうや ! 神戸 !” の掛け声とともに復興再生への意気は、いやがうえにも高揚しているといって過言ではない」という記述がある。

しかし、方言でスローガンが掲げられても、そのスローガンを目にした人たちがかならずしも諸手を上げて歓迎するわけではない。1995 年の阪神大震災後の被災地の様子について藤尾（1997）は、こう記している。

> 当然のことながら神戸はかつてないほど「鬱」の人があふれていた。言ってみれば「がんばろう」は禁句だった。にもかかわらず街じゅうにダイエーによる〔がんばろうや WE LOVE KOBE〕のポスターが貼られまくり、気晴らしにテレビをつけるとキャスターは「がんばって」と言い、イチローで注目されたプロ野球の神戸オリックスは全選手が肩

口に『がんばろう神戸』というワッペンを付けていた。これでは、精神医学的見地からは街をあげて「死ね、死ね」キャンペーンを展開しているようなものであった。（p269）

「死ね、死ね」キャンペーンという言い方には、震災によって苦しい状況に追い込まれた人たちに、精神医学的には禁句であるはずの「がんばろう」を連発した世間に対する強烈な皮肉が込められている。東日本大震災でも「がんばろう」をはじめ「がんばっぺ」「がんばるべ」「がんばっぺし」のように各被災地の方言の文末表現の違いに応じたフレーズが、標語や復興支援グッズに用いられることになった。「がんばろう」という激励の言葉を無暗に使うことに警笛を鳴らす立場からすれば、東日本大震災後のこうした動きも、実は「死ね、死ね」キャンペーンの繰り返しと言えるかもしれない。つまり、「がんばっぺ」や「がんばろうや」が方言だから激励として受け入れられるという意見もあるが、たとえ方言であったとしても「がんばろう」と意味的な違いがない以上、過酷な状況にいる人たちを追い詰めるフレーズになりうると否定的に受け取る立場もあるのである。

この相反する二つの反応―＜方言だから受け入れられる＞と＜方言であっても受け入れられない＞―の根幹には「がんばろう」という言葉自体が抱える問題がある。

大橋（2011）は、「がんばろう」というフレーズに対して共感と不信感といった真逆の反応が見られたことについて次のように述べている。

「がんばろう」という表現を選ぶことによって、このスローガンの発信者は震災後の状況を「がんばることができるもの」であると捉えているということが伝わる。

大橋は、非被災地が発信する「がんばろう」に対して被災者が「一体これ以上何をがんばれというのだ」という反発を抱く原因に、この「がんばろう」というフレーズが示唆する非被災者の「ものの見方」が関係していると論じる。

たしかに大津波で故郷が奪われ今までの生活を失くした人たちに、そうした経験をしていない者が「がんばろう」というのは無責任な印象がある。ならば、「一緒に」「ともに」という連帯感を表す言葉と共起させるということも考えられるが、その受け取りかたも人によって異なるだろう。大橋は「スローガンの発信者と被災者との『共通の基盤を示す』ための方略として『~ろう』という言い方が選ばれているのではないか」と指摘しているが、両者の間にある共通の基盤に少しでも齟齬があれば、被災者が「がんばろう」というフレーズに立腹したとしても不思議ではない。被災者を激励するつもりが、結果的に傷つけることになる。これが激励を意味する「がんばろう」というフレーズの落とし穴である。

3. 2　被災者の「方言スローガン」に対する違和感

被災地からは、スローガンとして掲げられた方言に対する違和感も聞こえてくる。大野他（2013）の岩手県山田町でのインタビューでの女性の回答は興味深い。「がんばっぺす山田」というフレーズが散見されることについて、女性は「言っていいのかな」とためらいながら、こう答えている。

なんかね、取って付けたように、ほんとはそうでもないのに、そういうところだけ強調すんなよ、こう思うような時はありますね。うん。そして、ニュアンスっていろいろあるんですよ。「がんばっぺす」というとこど、「がんばっぴす」というどこと。（p68）

この回答で注目したい点は二つある。一つは、女性が発言の前にためらったということ。もう一つは、「がんばっぺす」と「がんばっぴす」の違いに言及していること。さらに、この女性は次のような発言もしている。

例えば私は生まれながらに「がんばれよお」とか、「ここでがんばんねば駄目なんだがよ」とか、「がんばっぴしやな」とか、こういうふうに言ってきたのに、何、そんなの、田舎の言葉だけでなんだりかんだり使うみたいな感じでね、ここはそうでねえがみたいな感じなとこもあるんですよね。うん。（p68）

この女性は明らかに「がんばっぺす」の使用に疑問を呈している。その理由は、「がんばっぺす」が地元の方言ではないからだ。つまり、彼女の違和感は、地元の方言でもない方言（田舎の言葉）をここぞとばかりスローガンとして使っていることにある。音声学的に見れば、「がんばっぺす」と「がんばっぴす」の違いは母音 [e][i] の違いである。だが、地元の話者にとって、これは生まれ育った土地の言葉として譲れない違いなのだ。

復興のスローガンとして使用される方言に肯定的である点はこの女性と異なるものの、この女性の発言に見られる地元の方言へのこだわりは、岩手県陸前高田市の男性のインタビューにも見られる。

高田から発信しているのは、「がんばっぺし」のシールなんですよ。ああ、これで本当に頑張るっていう意味が、前に流れた禁句になっていた言葉と、ああほんとの頑張るってこういうことなのかなあって、被災地から発信したあの言葉の意味が分かってもらえたんじゃないかなあって。（p41）

つまり、被災者たちは復興への意志を表明したスローガンが掲げられているという事実だけでなく、地元の言葉を反映させたスローガンが掲げられているという点を重視している。故郷を唯一無二の存在と捉える被災者の心理がここからうかがえる。

震災後の方言について考えるうえで、もう一つ注意しておきたい点がある。先に紹介した岩手県山田町でのインタビューにあるように、女性が方言スローガンに対して否定的な意見を発言することにためらいを見せたということである。このインタビューが方言に関する調査であり、目の前にいる調査員に遠慮した可能性は高い。だが、筆者が被災地で見聞きした事柄を踏まえると、方言でスローガンが掲げられた地域ではその使用について否定的な意見が言えない空気感があったのではないかと推測される。それは、震災後に事あるごとに繰り返された「絆」という言葉を批判したり馬鹿にしたりしてはいけないという暗黙の了解が世間に浸透していたことに似ている。スローガンには良くも悪くも同調圧力が働く。「がんばっぺ」のように方言を用いたスローガンは、共通語のスローガンよりも親近感や共感が得やすいという調査結果がある（魏（2012）、半沢（2013））。だが、調査の及ばないところではスローガンとして掲げられた方言を批判的に捉えていた人たちがいたかもしれない。そもそも方言がそういうかたちで使われることに複雑な思いを抱いた人たちがいたかもしれない。スローガンとして掲げられた方言が、そういう人たちの思いを孤立させていたかもしれないということにも、方言研究者はもっと注意をはらう必要がある。

たとえば、調査に反映されない被災者の思いを私たちは、先に紹介したMさんのノートに見ることができる。東広島市の職員のMさんのノートの裏表紙には岩手県大槌町で配られたステッカー「負げねぞ大槌!」が貼ってあるが、その端に「そもそも負けた気はしてない。何に負けたって言うんだ」という手書きの文が写っている。これは、Mさんのノートをもとに「大槌弁取扱い説明書」を作成した大槌町のOさんによるものである。

【写真２】ノートに書かれた被災者のコメント

「負げねぞ大槌！」だけ見れば、このステッカーを見る者は被災地の復興にかける思いが方言で表現されていることに感動を覚えるかもしれない。東北方言の音声的な特徴にしたがって語中のカ行音が有声化して「負け」が「負げ」になること、そして連母音の融合によって否定の「ない」が「ね」になることを再現したステッカーは、「負けないぞ」という共通語によるスローガンよりもはるかに印象に残る。しかし、ノートの端に書かれた「そもそも負けた気はしてない。何に負けたって言うんだ」という手書きの文は、そんな情緒的な分析に揺さぶりをかける。なぜなら、ここにはこのスローガンに対する被災者の不信感とも言える感想が記されているからだ。いや不信感だけでなく、冷めた怒りのようなものすら感じさせる。少なくとも、この書き手は方言スローガンをありがたくは思っていない。

このステッカーをノートの裏表紙に貼った東広島市のMさんは、被災地の思いや目的を発信するための方法の一つとして「負げねぞ大槌！」を受け止めたという。だが、このステッカーがどのような経緯で、どのような団体が作成したのかはわからないという。Mさんの「この作り手の姿が見えない以上、良いとも悪いとも思わない」という言葉には被災者と方言の関係について考える手がかりがあるように思う。

2節で紹介した「釜石方言表」、釜石・大槌方言塾、「大槌弁取扱説明書」は被災者と支援者がともに同じ場所にいたことで生まれたものである。別の言い方をすれば、被災者と支援者が同じ現実に向き合った結果生まれたものである。

震災後すぐに掲げられた方言エールも、そうである。津波の爪痕が生々しく残る泥をかぶったままの建物に貼られた「がんばっぺ」や「負げねぇ」は、匿名であっても、それが同じような境遇にいる人からの発信であると知ることができた。つまり、お互いの姿は見えなくても、その発信者と受け手は同じ場面と文脈を共有しているということを実感することができた。

だが、時間の経過とともに、その文脈には時差が生じてくる。被災地の中に変化していく場所と変化しない場所があるように、被災者の心理にも変化していくものと変化しないものがある。それに気づかないまま、以前のままと同じ支援をしていれば、必ず支援者と被災者の思いの間には齟齬が生じてくる。そして、それはいつの日か相手への不信感や嫌悪感へつながっていく。

同じ「がんばっぺ」であっても、震災直後のライフラインもままならない状況で掲げられた場合と震災から一年以上たってライフラインが整備された状況で掲げられた場合とでは、被災者が受け取るメッセージには大きな違いがある。手書きによる震えた字の「負げねぇ」と綺麗に印刷され「負げねぇ」とでは、被災者の共感の度合いには埋めがたい差がある。

このように東日本大震災の発生直後から被災地に掲げられた方言エールは、やがて方言スローガンとして被災者への激励だけでなく復興への意志を表明するものへと変質する。それ

が、被災者の心理の変化と重なれば問題はないかもしれない。だが、そこに齟齬があれば、方言スローガンに対する不快感や嫌悪感は容易に消し去ることができなくなる。ましてや、自分たちの生活に根差した言葉である方言だからこそ、事は一層深刻になる。「そもそも負けた気はしてない。何に負けたって言うんだ」という O さんのコメントや被災地で聞こえてくる「もうたくさん」「わざとらしい」という声の背後には、こうした事情があるのではないだろうか。

4. お わ り に

災害ボランティア活動について論じた渥美（2012）は、「秩序化のドライブ」を回避すべきだと主張する。「秩序化のドライブ」とは、「災害ボランティア活動は秩序だって行うべきだとする強力な言説」のことである。渥美は「秩序化のドライブ」が作用した結果、東日本大震災では「効率規範（災害ボランティア活動について、事前に事細かく計画し、現場で受け入れ体制が整った場合に（のみ）活動に参加し、効率的な救援活動を展開すべきであるとする規範）」が優先されてしまったと指摘している。

本稿で取り上げた被災地の方言に対する取り組みは、「効率規範」とは縁遠いものである。むしろ、その逆と言えるかもしれない。場当たり的に方言を書き留め、それを面白がるのだから。そこには「被災地の復興のために」という崇高な志ではなく、「面白い」「楽しい」という素朴で嘘偽りのない感情がある。だが、被災者たちは、それによって震災で傷ついた地元の方言を再発見する喜びに浸り、それを生活の活力につなげていった。

東日本大震災後の方言による支援活動をまとめた櫛引（2013）では、「見えにくい被災者の居場所を伝える方言」として、こう述べた。

> 大切なのは「被災地の復興」という言葉を声高に叫ぶのではなく、そこにいる被災者一人一人の存在を見失わないことだ。そういう意味で、災害直後から時間が経過しても続けられている支援活動には、どんな活動であれ、そこに被災者がいて、ここに支援者がいるということを意味する“旗印”的な性格がある。本稿で紹介した方言による支援活動も例外ではない。
>
> だが、方言による支援活動の場合は、支援で使われる方言が、方言と共に暮らす人たちの存在をリアルに想起させるため、より鮮明で切実な“旗印”になる。これは、方言エール（方言スローガン）に関して田中（2011）が述べる精神的支柱や、小林隆他（2012）が指摘した仲間意識の喚起とか一体感の強化という心理的な機能とは違うかたちで、時間の経過とともに見えにくくなっていく被災者の支援に大きな役割を果たすだろう。

被災者が拠り所を求めている限り、その人たちの生活に欠かせない方言は、ここで述べているような旗印的な機能を担う。しかし、方言が被災者と支援者の居場所を伝える旗印としての役割を果たした結果、両者をつなぎとめる鏹（かすがい）のような役割まで果たすのかと言えば、首を縦に振ることはできない。

そう考える理由は、筆者がほぼ毎月訪れている宮城県名取市の仮設住宅でおこなわれている方言による支援活動にある。この支援活動の団体「方言を語り残そう会」は毎月第四土曜日に1時間半にわたって方言を用いながら昔話を語ったり、簡単な体操を住民たちとおこなったりするが、終始一貫して方言を使うわけではない。また、仮設住宅の住民たちも支援団体のメンバーと方言だけで会話しているわけではない。櫛引（2014）で報告したように、高年層にとっても方言は希少な言葉であり、だからこそ支援活動の目玉となり得るのだ。

では、いったい何が支援者と両者をつなぎとめているのか。これは、一言で言えば、身体に刻み込まれた地域の記憶である。その中にはもちろん、地域の言葉である方言も含まれるだろう。だが、地域の記憶は「言語の水準というよりも身体の水準」（渥美（2012））で刻み込まれている。それを垣間見たのが、「方言を語り残そう会」が企画した方言劇のなかで仮設住宅の住民たちと会のメンバーたちが踊る「閖上大漁祝い唄」であり、5分強ある「名取閖上めぐり歌」を途切れることなく合唱する様子であった（櫛引（2014））。「方言を語り残そう会」と仮設住宅の住民たちは方言をきっかけに出会い、互いの身体に刻まれた地域の記憶に共鳴し合うことで関係を強化しているのである。

この関係のあり方は、本稿の2節で紹介した「釜石方言表」や「大槌弁取扱い説明書」で見た被災者と支援者の関係のあり方とは異なる。2節の図で示したように、「釜石方言表」や「大槌弁取扱い説明書」は他地域からの支援者の存在が出発点となった活動だが、「方言を語り残そう会」の仮設住宅での活動は、同じ地域の生活者である被災者と支援者の間でおこなわれているからである。むしろ、この活動は釜石・大槌方言塾と似ている。というのは、釜石・大槌方言塾も同じ地域で生活する被災者と被災者でもあるスタッフの関わりの中で活動が展開していったからである。

だが、いずれの活動にも共通しているのは、方言が被災者と支援者の関係を構築するための屋台骨として機能している点である。屋台骨は家屋を支える骨組だが、それだけでは雨風はしのげない。壁や屋根が必要であり、快適に生活するのなら内装にこだわる必要もある。

被災者と支援者の関係を構築する方言の役割もこれに似ている。方言スローガンに対する被災者の印象が教えてくれるように、ただ方言があるだけでは意味がない。そこにプラスされていく要素、たとえば地域の記憶とか地元の方言を再発見する喜びや楽しみとか、そうしたものが両者の関係をより強固なものにしていくのである。言うなれば、そうした一見すると地域の復興とか生活の再建といったものとは縁遠いもの、でも、確かにそれがなければ生

活が色褪せてしまうもの、そうしたものが被災者にとって居心地の良い場所を築いていくのである。

注

1　大槌で使う「ぺっこ」「ぺぇんこ」は、程度や限定を意味する「バカリ」が語源である。この「バカリ」を東北方言では「バリ」と言うが、これに指小辞「コ」が添加して各地で形態を変化させた。岩手から宮城にかけて「ばっこ」「びゃっこ」が使用されている。

2　「すける」は古語の「スク」に由来する。共通語の「タスケル」は、「スク」に「手（タ）」が上接した語である。時代劇で耳にする「助っ人（スケット）」「助太刀（スケダチ）」は古語「スク」の複合語である。

3　大槌（おおつち）が「おーづつ」となるのは、東北方言の音声的な特徴によるものである。東北では語中のタ行音が濁音化する。それゆえ、「おおつち」の「つ」は「づ」になる。また、中舌母音（[i]と[ɯ]の母音の中間的な発音[ɨ]）によって、「ち[tɕhi]」と「つ[tsɯ]」の発音の境界が曖昧になる。その結果、「おおつち」の「ち」は「つ」と表記される。

4　「ほぉでーねー」を漢字表記にすると「放題ない」になる。「放題」は思うままに行動することで、共通語では動詞や形容動詞の連用形に接続して「荒れ放題」「食べ放題」「好き放題」などの語構成要素として使用される。東北では接尾語「ない」が下接し「放題ない」となり、連母音の融合で「放題ねー」となった。東北方言の「ほぉーでねー」が「訳が分からない」「混乱する」という意味を表すのは、思うままに行動する相手の様子に接する受け手の<訳が分からず混乱させられる>という認識が反映されたものである。

5　ここで用いた阪神大震災と東日本大震災の災害規模の違いを“点”と“面”に置き換えた比喩は、筆者が2011年3月11日に仙台で聞いた深夜ラジオのアナウンサーの説明によるものである。

6　「がんばっぺ」「がんばっぺし」の「ぺ」「ぺし」などの文末形式は意志や勧誘を意味し、古語の助動詞「べし」に由来する東北と関東の方言である。

引 用 文 献

渥美公秀（2012）「災害ボランティア活動とコミュニケーション」『日本語学』vol.31-6

岩城裕之・今村かほる・武田拓・友定賢治・日高貢一郎(2013)「災害時・減災のための方言支援ツールの開発」『第97回日本方言研究会発表原稿集』日本方言研究会

今村かほる・岩城裕之・武田拓・日高貢一郎・友定賢治「災害時の医療・福祉現場における方言の問題と支援―東日本大震災から学ぶ減災のための方言支援ツール―」『第34回社会言語科学会発表論文集』社会言語科学会

大野眞男（2013）「まえがき」『東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（岩手県）』文化庁委託事業報告書

大野眞男・斎藤孝滋・大橋純一・田中宣廣「被災住民の言語意識」『東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（岩手県）』文化庁委託事業報告書

大橋理枝（2011）「東日本大震災復興スローガンのコミュニケーション」『放送大学研究年報』29

北後寿（2006）『被災から復興へ　近代都市の巨大地震災害を追う―神戸・メキシコ大震災を中心に―』イワキ・プランニング・ジャパン

魏ふく子（2012）「方言は被災者を支えることができるか」『方言を救う、方言で救う3・11被災地からの提言』ひつじ書房.

櫛引祐希子（2013）「方言による支援活動」『国語学研究』52　東北大学国語学研究室
櫛引祐希子（2014）「被災地の方言を撮る―方言研究者による映像アーカイブ―」『第34回社会言語科学会発表論文集』社会言語科学会
小林隆（2013）「現代方言の文語化傾向」『学燈』vol.109-3　丸善出版
竹田晃子(2012)『東北方言オノマトペ用例集』国立国語研究所
田中宣廣（2011）「地域語の底力―方言エールと言語経済学の方法―」『第93回日本方言研究会研究発表予稿集』日本方言研究会
田中宣廣（2012）「方言エールの用法と機能」『第30回社会言語科学会発表論文集』社会言語科学会
筑紫磐井（2006）『標語誕生!大衆を動かす力』角川書店
東北大学方言研究センター(2012)『方言を救う、方言で救う3・11被災地からの提言』ひつじ書房
半沢康（2013）「被災された方々および支援者の方言意識」『東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（福島県）』文化庁委託事業報告書
藤尾潔（1997）『大震災名言録　「忘れたころ」のための知恵』光文社